

平成 24 年度 第 5 回文系チャレンジ講座を開催しました

第 5 回文系チャレンジ講座が、2012 年 10 月 17 日、「簿記を味わおう！」をテーマに本学経済学部に加藤典生准教授によって行われました。遠隔配信された大分雄城台・大分鶴崎・大分商業・安心院(あじむ)・日田の 5 校(90 名)と、来学した臼杵(40 名)を合わせて、計 130 名の高校生が受講しました。

加藤准教授は、「簿記と各種検定試験を結びつけたり、企業経営のための分野だと思っている人がいると思います。簿記は様々な分野に関わっています。簿記の美しさに魅了された数学者や小説家もいます。高校生の皆さんと簿記を文学、美術、歴史、経済学などとの関係から覗いてみたいと思います。」と、メッセージを送っています。

今回の講義では、簿記が昔からどのように使われてきたかを紹介しました。例えば、皆さんも知っている無人島にたった一人漂着した『ロビンソン・クルーソー』は、難破船から、食料や資材などを探し出しそれらを島に運び、大麦などを地面にまいて収穫したり、ヤギを捕まえて家畜として飼うようになります。毎年、穀物や家畜の数量を正確に記録していました。これは、簿記そのものです。1 年間の取引(会計)を記録(仕訳)し、分類・集計し、報告書(決算書)を作成することが簿記なのです。

また、諸説がありますが、今から 600 年以上も前のルネサンス期、「近代複式簿記の父」と呼ばれるルカ・パチオリ(1445 年頃～1514 年)の功績と「ヴェネチア商人の記帳の方法」として簿記を紹介されました。そして、ルカ・パチオリは、レオナルド・ダ・ヴィンチと親交があったことも学習しました。この原理が今も使われていることは驚くべきことです。

受講生は実際に貸借に関する計算をして、数字が一致する驚きや、どうすれば美しく計算式があらわせるかなど、簿記の必要性や面白さをわかりやすく説明していただきました。

今回の講義を通じて、簿記の世界を少し覗けたのではないかと思います。受講生は、「簿記・会計の研究はロマンとそろばん」という言葉の中に、難解なイメージがかなり改善されたようでした。加藤准教授の「夢をかなえるためにいかに現状を変えるべきか、それを考えるのが簿記である」ということばが、とても印象的でした。

受講後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(99%)、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(100%)、「授業内容はわかりやすかった」(97%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(95%)と高い評価結果がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(95%)、「映像はよく見えた」(97%)という結果がでました。

受講生の具体的な声として、「高校で学ぶ簿記と異なり、とても楽しい時間であった」「経済学に興味をわき、大学で学びたいと思った」「メモする時間を割いていただき、スライドがわかりやすかった」「世界史の授業で学習したこと出てきたことや文学と関係があることがわかり、大学の授業を体験でき、先生の真剣さが伝わった」「簿記の歴史を知ることができ、奥が深いと思った」「遠隔配信授業で実際、大学で授業を受けているみたいで、他校生の様子がわかり参考になった」など多くの感想が寄せられました。簿記が身近に感じる講座でした。

